

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520237

研究課題名(和文) 19世紀アメリカ小説における動物表象の科学史・文化史的研究

研究課題名(英文) A Study of Animal Representation in Nineteenth-Century Novels through History of Science and Cultural History

研究代表者

佐久間 みかよ (SAKUMA MIKAYO)

和洋女子大学・言語・文学系・准教授

研究者番号：00327181

研究成果の概要(和文)：19世紀のアメリカ人作家メルヴィル、エマソンを中心にして、その自然観を考察するため、作品の動物表象に着目し研究を行った。その結果、当時発達した自然科学の影響を受けた多様な生物への関心がまし、また植民化活動の活発化から派生した東洋の文化・思想の流入した結果、動物と人間の融合する自然観、世界観が作品に反映されていることが確認できた。これらは今日の動物の権利、エコロジースト的思考へと向かう流れを形成していると思われる。

研究成果の概要(英文)：By shedding light on animal representation in nineteenth-century writers, especially Herman Melville and Ralph Waldo Emerson, this study argues that the interest in various animals spurred by the development of natural science and the influx of Oriental culture and thoughts brought by colonial expansion could shape their ideas toward the view of compatible relationship between nature and humans. Their depictions of animals under such influences could pave a way to recent ideas of animal rights and ecology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：米文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学 動物表象 東西交流 19世紀アメリカ メルヴィル エマソン

1. 研究開始当初の背景

19世紀は、科学史、文化交流の面で発達の著しい世紀であった。これらが文学にどのような影響を与えたかの研究をするにあたって、先行研究は主に以下の二つの方向があった。

(1) 科学言説の影響研究—ジリアン・ピアなどによる研究により、進化論が文学者の世界観に影響を与えたことが指摘されていた。

(2) 文化交流史の研究—エドワード・サイ

ードの、言説としてのオリエンタリズム批判を補足する形で、オリエンタリズムが与えた影響について、ヒルトン・オベンジンガー、ティモシー・マーの研究が、オリエンタリズムが西洋にとってどのような意味を持つか、ユダヤ教的思想、またイスラームの影響という個別の影響関係を明らかにしようとする個別化による影響関係を研究する動向があった。

2. 研究の目的

本研究では、19世紀アメリカ小説を中心に、研究当初の背景としてあった、科学言説の影響と文化交流の影響の二つの相互の影響を研究するため、動物表象に注目し、アメリカにおける19世紀的自然観の特徴を明らかにし、現代の生命観、自然観への流れを考察することを目的とした。

3. 研究の方法

科学史、文化史の影響を考察するため、科学史の面では、自然科学の発達による自然史、及び動植物の図鑑の製作史の影響を考察し、文化史の面では、オリエントの文化、言説の影響がどのようにあらわれるかを中心に研究することにした。

(1) 科学史的研究

アメリカでのダーウィンの進化論の影響を再考するため、まずダーウィン以前の進化論的言説がアメリカ知識人に与えた影響を考察し、またダーウィンの進化論自体が文学者にどのように受容されたかを考察するため、エマソンの日記、作品、メルヴィルの作品、及び、ハーバードの植物学者エイサ・グレイによるダーウィンの進化論をアメリカへ紹介する際の経緯について研究することとした。

(2) 文化史的研究

エマソン、メルヴィルの作品のなかで、オリエントを舞台にしたものや、オリエントを想起させる作品を選び出すこととした。その上で、エマソンの日記にあらわれるJapanという言葉が示す背景を調査することで、アメリカ人にとってのオリエントの持つ意味を考察することとした。

(3) 派生的研究

上記から派生的にでてきた問題系として太平洋がどのような射程でアメリカ文学に入っているか、ジャック・ロンドンのハワイを舞台にした短編、また東西交流にかかわる形で移民の問題としてアイルランド移民の表象、及び東西関係の破綻した形としておこる戦争について19世紀がどのようなロジックを持っていたか、エマソン、メルヴィルの作品で考察することとした。

4. 研究成果

研究成果を、米国の3つの学会と国内のシンポジウムで発表することにより、19世紀アメリカ文学を考える際、自然史、東西交流、動物表象の重要性を喚起することができた。

さらにこれを論文としてまとめ整理し、また今後の展開をふくめ報告書の形でまとめた。

(1) 自然史の発展、文化交流の発展という観点から一自然史の発展について、とくに図鑑の精妙な描写が、動植物を人々にとって身近なものとすることに貢献し、エマソンの自然描写に与えた影響を考察し論文とした。さ

らに、エマソンと物質文化の影響を中心に東西交流のあり方の成果の発表の場としてアメリカALA年次大会の場で成果を発表することができ、物質文化を通じた興味からやがて思想へと興味が進展する過程をエマソンと日本の関わりについて問題提議をすることができた。

また、東西交流という点で、国内のメルヴィルのシンポジウムに参加し、メルヴィルの思想形成における文化の射程の広さを指摘できた。

(2) 動物表象におけるオリエントの影響について—メルヴィルの動物表象の特徴をメルヴィル国際学会で発表し、オリエントの影響の大きさを指摘した。具体的には、聖地巡礼を舞台にした作品で動物がどのようにあらわれているかを研究したものであり、地形をあらわす際に使われる象からは、当時アメリカで象が人々の耳目を集めていた点を指摘し、またロバの描写からは旧約聖書的な忍耐のテーマ、そして馬の描写からは、レバント地方特有の人と動物の一体感に基づく自然観が作品中に描かれていることを指摘し、メルヴィルがオリエントにおける動物のしめる場というものに気づき、これらを作品にあらわすことで、人間と動物が一体化したエコロジカルな世界を東洋の影響のもと描いていると論じた。これを論文とし投稿した。

(3) 太平洋という観点—ハワイを舞台にした小説を考察し、太平洋上の島の生物がどのように捉えられていたか、また島自体がどのように捉えられていたかを、米国PAMLA学会で発表し、アメリカ文学を考える際、島のもつ重要性を指摘することができた。

(4) 移民の観点—アイルランド移民に焦点をあて、メルヴィル、エマソンなどが彼らをどのように捉えているかを考察し、異質なものに対する作家たちの寛容性と社会の排除性を指摘した。

(5) 研究成果と今後の展望

エマソンやメルヴィルの作品における動物表象から、動物の捉え方にオリエント的な影響のあることが指摘できた。こうした東洋の影響を受けた動物表象を再考することで、サイドの分析したオリエンタリズムというオリエント表象への批判を再考することができる。人口に膾炙したオリエンタリズムは、18世紀以降、海外進出の機会を持ったイギリス人、フランス人などの旅行記から次第に形成された言説であると分析されている。サイドは序論で、アメリカのオリエント体験はヨーロッパの体験と違った形であると指摘し、メルヴィル、トウエインの名をだしながらその詳細な分析はしていない。オリエンタリズムの構築にアメリカの言説がどのようにかかわったかは曖昧なまま終わっている。文化交流の影響を跡づける研究をすること

により、アメリカ的経験の分析をする必要が感じられた。「オリエンタリズム」に含まれる西洋近代（植民者）という「他者を通して自己理解」をいったんアメリカでなくヨーロッパのものとして捉え直す時、19世紀においてアメリカがこれにどれほどとらわれていたか、あるいはいなかったかの検証が必要となる。しかし、ここで注意すべきは、アメリカの特殊性をいうことで、ピューリタンのモノカルチュラルな言説に戻るのではなく、エマソンが「自然」の冒頭で述べた自分の目でみよというテーゼがどれほど有効であったか見直すことが重要である。自分の目で確かめた上での認識が19世紀中葉のアメリカ作家に共通であったとすると、彼らのオリエンタリズムは、やはり一枚岩的に捉えるべきではない。オリエンタリズムは決して一枚岩的なものでなく、多様な万華鏡のようなものであり、他者の自己規定を逆向きに見ることで、多様な自己があわれてくることとなる。そうした観点で、動物表象を見直すことで、新たなアメリカ像が浮かぶこととなるのである。

この結果、二つのアメリカ像が浮かんでくる。ひとつは巨大生物に興味を描くメルヴィルの見るアメリカであり、その対局にあるのがエマソンの小動物に注目する眼差からみたアメリカである。メルヴィル的な見方は、人間の力の外にある大きな自然という認識をあらわしており、エマソンの小動物への注目は、人間の認識で統合できる自然という考え方に基づいている。こうした二様の捉え方が19世紀アメリカ文学をみる際に重要となる。巨大生物に興味を持ったメルヴィルが、南洋諸島や奇妙な生物の生息するガラパゴス諸島などを回った経験のあることは、文化交流という点で特筆に値する。また、エマソンが自然博物館という構成された世界で小動物のあり様から、人間と一体化する自然という観念を導き出した点は、メルヴィル的な考え方とは対照的な世界観をつくることとなったといえよう。

また、オリエントの影響という観点で研究した時見いだした象という生物への注目は19世紀に特徴的なことであるといえる。当時多くの人々が興味を持った象は、単に新聞をかざるだけでなく、風刺の際用いられ、政治の風刺画として用いられる。象は民主主義を象徴するものとなり、のちに共和党のシンボルマークとなっていく。

メルヴィルは巨大生物に関心を抱いたが、象への興味は、『白鯨』の白い象、『マカバイ書』の象の挿絵の所有、『クラレル』でのエルサレムの地形の比喩として登場する。また、鯨については、文字通り『白鯨』では、鯨学というセクションを設け、鯨の生態を描いている。これは、鯨という巨大生物がメルヴィルの想像力にとっては、重要な位置を占めてい

ることのあらわれといえる。上述した政治の風刺画に象が登場することと考えあわせるとアメリカ人がもつ政治に対するイメージが動物に反映されているとも考えられる。であるなら、アメリカの民主制が巨大な力をもつものであると当時の人々が感じていると解釈できよう。

また、エマソンの動物を見るミクロな見方、メルヴィルの動物をみるマクロな捉え方から、アメリカが対立的な思考方法を内包しつつ、巨大国家へとようになっていく19世紀という時代の理解を深めることができたと考える。言い方をかえればこうした求心的な見方と遠心的な見方は、やがてナショナルであってグローバルというアメリカ的思考へと連なっていくことが推測される。そこで今後は、この動きを研究すべく「島」の表象に注目して、孤立しつつ共存する島の表象を通してアメリカのナショナルであってグローバルな自己イメージの解明をさらにすすめていきたいと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 佐久間みかよ、 “Povertiresque: The Representation of Irish Immigrants in Nineteenth-Century America,” *The Japanese Journals of American Studies*, 査読有 Vol. 22, 2011年6月予定
- ② 佐久間みかよ、「群島の思考：ハーマン・メルヴィルの“The Encantadas, Enchanted Isles”考」、『和洋女子大学紀要』、査読有り、49集、2010年、33-47.
- ③ 佐久間みかよ、「Ungarの十字の剣」、『第81回大会 Proceedings』、査読なし113号、2009年、227-29.
- ④ 佐久間みかよ、「ダーウィンを読むメルヴィル」、『英語青年』、査読有、2009年、13-15
- ⑤ 佐久間みかよ、「Ralph Waldo Emersonの“Rhodora”再読—ナチュラリスティックと東洋」、『和洋女子大学紀要』、査読なし、49集、2009年、33-47.

〔学会発表〕（計5件）

- ① 佐久間みかよ、 “Far and Near: The Position of the Islands in Jack London and Haruki Murakami’s Hawaiian Novels,” PAMLA学会、2010年11月14日、ホノルル（アメリカ合衆国）
- ② 佐久間みかよ、「ダイアルからみるエマソンとソロー」、日本ソロー学会全国大会、2010年10月8日、青山学院大学

- ③ 佐久間みかよ、 “Melville’ s Animal Representation in *Clarel*,” 第7回メルヴィル国際学会、2009年7月21日、エルサレム（イスラエル）
- ④ 佐久間みかよ、「Ungarの十字の剣」、日本英文学会第81回全国大会シンポジウム、2009年5月31日、東京大学。
- ⑤ 佐久間みかよ、“Transpacific Understanding：What is Japan to Emerson and What is Emerson to Japan,” ALA年次大会、2008年5月23日、サンフランシスコ（アメリカ合衆国）。

[図書] (計1件)

佐久間みかよ、(共著) 牧野有通編、 “Presenting Discord toward Harmony: the Presence of Ungar,” *Melville and the Wall of the Modern Age*, 南雲堂、 (総238ページ) 165-84.

[その他]

- ① 報告書
佐久間みかよ、「科学研究費報告書」2011年、ヤマノ印刷、総54。
- ② 研究会発表
佐久間みかよ、「アメリカンルネサンスと戦争言説—メルヴィルの位置」、九州アメリカン・ルネサンス研究会、2010年8月19日、福岡大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐久間 みかよ (SAKUMA MIKAYO)
和洋女子大学・言語・文学系・准教授
研究者番号：00327181

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：